

# 魚玄機

森鷗外

青空文庫



魚ぎよげんき玄機が人を殺して獄に下った。風説は忽たちまち長安人士の間に流伝せられて、一人として事の意表に出でたのに驚かぬものはなかつた。

唐とうの代には道教が盛であつた。それは道士等が王室の李り姓であるのを奇貨として、老子を先祖だと言い倣なし、老君に仕うることを宗そうびよう廟に仕うるが如ごとくならしめたためである。天宝以来西の京の長安には太清宮たいせいきゆうがあり、東の京の洛陽らくようには太微宮たいびきゆうがあつた。その外ほか都会ごごとに紫極宮しきよくきゆうがあつて、どこでも日を定めて厳かな祭が行われるのであつた。長安には太清宮たいせいきゆうの下しもに許多いくたの楼観がある。道教に観があるのは、仏教に寺があるのと同じ事で、

寺には僧侶そうりよが居おり、観には道士が居る。その観の一つを咸宜かんぎかと云つて女道士じよどうし魚玄機はそこに住んでいたのである。

玄機は久しく美人を以て聞えていた。趙瘦ちようそうと云わむよりは、

むしろ楊肥ようひと云うべき女である。それが女道士になつてゐるから、

脂粉けがの顔色をすを嫌つていたかと云うと、そうではない。平生

粧よそおいを凝かたちし容かぎを治つていたのである。獄に下つた時は懿宗いそうの咸通かんつう

九年で、玄機は恰あたかも二十六歳になつていた。

玄機が長安人士の間に知られていたのは、独り美人として知ら

れていたのみではない。この女は詩を善よくした。詩が唐の代に最

も隆盛であつたことは言を待たない。隴西ろうせいの李白りはく、襄陽じようようの

杜甫とほが出て、天下の能事を尽した後に太原たいげんの白居易はくきよいが踵ついで

起つて、古今の人情を曲きよくじん尽し、長恨歌ちやうこんかや琵琶行びわこうは戸ごとに誦そらんぜられた。白居易の亡くなつた宣宗せんそうの大たい中ちゆう元年に、玄機はまだ五歳の女兒であつたが、ひどく伶俐れいりで、白居易は勿論もちろん、それと名を齊ひとしゆうしていた元微げんびし之の詩をも、多く暗記して、その数は古今体を通じて数十篇に及んでいた。十三歳の時玄機は始めて七言絶句を作つた。それから十五歳の時には、もう魚家の少女の詩と云うものが好事者こうずしやの間に写し伝えられることがあつたのである。

そう云う美しい女詩人が人を殺して獄に下つたのだから、当時世間の視聴を聳しやうどう動どうしたのも無理はない。

魚玄機の生れた家は、長安の大道から横に曲がつて行く小さい街にあつた。所謂いわゆる狭きようしや邪じやの地でどの家にも歌女かじよを養つてゐる。魚家もその倡家しようかの一つである。玄機が詩を学びたいと言ひ出した時、両親が快く諾して、隣街の窮措大きゆうそだいを家に招いて、平ひようそ仄くや押韻の法を教えさせたのは、他日この子を揺金樹ようきんじゆにしようと云う願があつたからである。

大中十一年の春であつた。魚家の妓数人ぎが度々ある旗亭きていから呼ばれた。客は宰相令狐綯れいことうの家の公子で令狐れいこかく※と云う人である。貴公子仲間の斐誠ひせいがいつも一しよに来る。それに今一人の相伴が

あつて、この人は温おんせい姓で、令狐や斐しようきに鍾馗しようき々々と呼ばれている。公子二人は美服しているのに、温は独り汚あかれ垢あかついた衣きぬを着ていて、兎角とかく公子等に願い使しせられるので、妓等は初め僮僕どうぼくではないかと思つた。然しかるに酒酣たけなわに耳熱して来ると、温鍾馗は二公子を白眼みに視みて、叱咤しつた怒号する。それから妓に琴を弾かせ、笛を吹かせて歌い出す。かつて聞いたことのない、美しい詞ことばを朗かな声で歌うのに、その音調が好く整つていて、しろう人ととは思われぬ程である。鍾馗の諱名あだなのある于思うさいかんかんもく、目の温が、二人の白面郎に侮そはられるのを見て、嘲ちやうぎやく 諛ちやうぎやくの目標ちやうぎやくにしていた妓等は、この時温そはの傍そばに一人寄り二人寄つて、とうとう温を囲んで傾聴した。この時から妓等は温と親しくなつた。温は妓の琴を借りて弾いたり、

笛を借りて吹いたりする。吹すいたん弾の技も妓等の及ぶ所ではない。

妓等が魚家に帰つて、頻しきりに温の噂うわさをするので、玄機がそれを聞

いて師匠にしている措大に話すと、その男が驚いて云つた。「温

鍾馗と云うのは、恐らくは太原の温岐おんきの事だろう。またの名は庭

筠いん あざな ひけい、字は飛卿である。挙場にあつて八たび手を叉こまぬけば八韻の詩

が成るので、温おんはつしゃ八叉と云う諱名もある。鍾馗と云うのは、容

貌うが醜怪だから言うのだ。当今の詩人では李商隱りしよういんを除いて、

あの人の右に出るものはない。この二人に段成式だんせいしきを加えて三名

家と云っているが、段はやや劣っている」と云つた。

それを聞いてからは、妓等が令狐の筵えんかい会かいから帰る毎ごとに、玄機

が温の事を問う。妓等もまた温に逢あう毎ごとに玄機の事を語るように



なつた。そしてとうとうある日温が魚家に訪ねて来た。美しい少女が詩を作ると云う話に、好奇心を起したのである。

温と玄機とが対面した。温の目に映じた玄機は将まさに開かむとする牡丹ぼたんの花のような少女である。温は貴公子連と遊んではいるが、もう年は四十に達して、鍾馗の名なに負そむかぬ容貌ようぼうをしている。開成の初に妻を迎えて、家には玄機とほとんど同年になる憲と云う子がいる。

玄機は襟えりを正ただして恭うやうやしく温を迎えた。初め妓等に接するが如き態度を以て接しようとした温は、覚えかたちず容を改めた。さて語を交えて見て、温は直に玄機が尋常の女でないことを知つた。何故なぜと云うに、この花の如き十五歳の少女には、些ちとの嬌きようしゆう 羞ゆうの色もなく、

その口吻こうぶんは男子に似ていたからである。

温は云った。「卿けいの詩を善くすることを聞いた。近業があるなら見せて下さい」と云った。

玄機は答えた。「児じは不幸にして未いまだ良師を得ません。どうして近業の言うに足るものがあります。今伯樂はくらくの一顧を得て、ほんてい奔ほんして千里を致すの思があります。願わくは題を課してお試み下さい」と云ったのである。

温は微笑を禁じ得なかった。この少女が良驥りょうきを以て自ら比するの、いかにもふさわしくないように感じたからである。

玄機は起たつて筆墨を温の前に置いた。温は率然「江辺柳」の三字を書して示した。玄機が暫しばらく考えて占せん出しゅつした詩はこうであ

る。

賦得江辺柳

翠色連荒岸。  
すゐしよくくわうがんにつらなり

烟姿入遠楼。  
えんしゑんろうにいる

影鋪秋水面。  
かげはしうすゐのおもてにのべ

花落釣人頭。  
はなはつりびとのかうべにおつ

根老藏魚窟。  
ねはおいてぎよくつかくれ

枝低繫客舟。  
えだはひくくきやくしうつながる

蕭々風雨夜。  
せうせうたりふううのよ

驚夢復添愁。  
ゆめよりさめてまたうれひをそふ

温は一誦して善しと称した。温はこれまで七たび挙場に入った。

そして毎に堂々たる男子が苦索して一句を成し得ないのを見た。  
彼輩は皆遠くこの少女に及ばぬのである。

此を始として温は度々魚家を訪ねた。二人の間には詩筒の往

反織るが如くになった。

温は大中元年に、三十歳で太原たいげんから出て、始て進士の試しに応じた。自己の詩文は燭一寸を燃もやさぬうちに成つたので、隣席のものが呻吟しんぎんするのを見て、これに手を仮かして遣やつた。その後挙場に入る毎に七八人のために詩文を作る。その中には及第するものがある。ただ温のみはいつまでも及第しない。

これに反して場外の名は京師けいしに騒いで、大中四年に宰相になつた令狐綯も、温を引見して度々筵席に列せしめた。ある日席上で綯が一の故事を問うた。それは莊子そうしに出ている事であつた。温が

直ちに答えたのは好いが、その詞は頗る不謹慎であつた。「それは南華に出ております。余り僻書ではございません。相公もしょうりいとま理の暇には、時々読書をもなさるが宜しゅうございませう」と云つたのである。

また宣宗が菩薩蛮の詞を愛するので、絢が填詞して上つた。

実は温に代作させて口止をして置いたのである。然るに温は酔つてその事を人に漏した。その上かつて「中書堂内坐将軍」と云つたことがある。絢が無学なのを譏つたのである。

温の名は遂に宣宗にも聞えた。それはある時宣宗が一句を得て対を拳人中に求めると、温は宣宗の「金步揺」に対するに「玉よくじようだつ条脱」を以てして、帝に激賞せられたのである。然るに宣

宗は微行をする癖があつて、温の名を識しつてから間もなく、旗亭で温に邂かい逅こうした。温は帝の顔を識らぬので、暫く語を交えていゝうちに傲ごう慢まん無礼の言をなした。

既にして挙場では、沈ちん詢じゆんが知挙になつてから、温を別席に

居らせて、隣に空席を置くことになつた。詩名はいよいよ高く、

帝も宰相もその才を愛しながら、その人を鄙いやしんだ。趙ちよう顓せんの妻

になつてゐる温の姉などは、弟のために要路に懇請したが、何の甲斐かいもなかつた。

温の友に李億りおくと云う素封家があつた。年は温より十ばかりも少くすこぶて頗る詞賦しふを解していた。

咸通かんつう元年の春であつた。久しく襄陽じょうように往つていた温が長安かえに還つたので、李がその寓居ぐうきよを訪ねた。襄陽では、温は刺史し徐商じょしょうの下で小吏もとになつて、やや久しく勤めていたが、終ついに厭倦えんけんを生じて罷めたのである。

温の机の上に玄機の詩稿があつた。李はそれを見て歎たん称しょうした。そしてどんな女かと云つた。温は三年前から詩を教えている、花の如き少女だと告げた。それを聞くと、李は精くわしく魚家のある街まちを問うて、何か思うことありげに、急いで座を起つた。

李は温の所を辞して、徑ただちに魚家に往いつて、玄機を納いれて側室

にしようと言つた。玄機の両親は幣へいの厚いのに動された。

玄機は出て李と相見た。今年はもう十八歳になつてゐる。その容貌の美しさは、温の初て逢つた時の比ではない。李もまた白はくせ皙きの美丈夫である。李は切に請い、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は即時に成就して、数日の後に、李は玄機を城外の林りんて亭いに迎え入れた。

この時李は遽にわかに発した願が遽かに慚なつたように思つた。しかしそこに意外の障しょう礙がいが生じた。それは李が身を以て、近ちかづこうとすれば、玄機は回避して、強せまいて逼れば号泣するのである。林亭は李が夕ゆうに望うを懐いだいて往あき、朝あしたに興あを失つて還とるの処ところとなつた。

李は玄機が不具ではないかと疑つて見た。しかしもしそうなら、



初に聘へいを卻しりぞけたはずである。李は玄機に嫌われているとも思うことが出来ない。玄機は泣く時に、一い旦たん避けた身を李もたに靠せ掛けてさも苦痛に堪えぬらしく泣くのである。

李はしばしば催してかつて遂げぬ欲望のために、徒らに精神を銷磨しょうまして、行住座臥こうじゆうざがの間、恍惚こうこうとして失する所あるが如くになった。

李には妻がある。妻は夫の動作が常に異なるのを見て、その去住に意を注いだ。そして僮僕どうぼくに啗くちわしめて、玄機の林亭にいることを知った。夫妻は反目した。ある日岳父むこが婿むこの家に来て李を面責し、李は遂に玄機を逐おうことを誓った。

李は林亭に往つて、玄機に魚家に帰ることを勧めた。しかし魚

は聴かなかつた。縦令たといふたおや一親は寛仮するにしても、女伴じよはんの侮あなどりを受けるに堪えないと云うのである。そこで李は兼かねて交つていた道士趙鍊師ちようれんしを請しやうだい待たいして、玄機の身の上を託した。玄機が咸宜観に入つて女道士になつたのは、こうした因縁である。

玄機は才智に長たけた女であつた。その詩には人に優れた剪裁せんさいの工たくみがあつた。温を師として詩を学ぶことになつてからは、一面には典籍の涉獵に努力し、一面には字句の錘鍊つうれんに苦心して、ほとんど寢食を忘れる程であつた。それと同時に詩名を求める念が

漸く增長した。

李に聘せられる前の事である。ある日玄機は崇真觀に往つて、南楼に状元以下の進士等が名を題したのを見て、慨然として詩を賦した。

遊崇真觀南楼。新及第題名処。

雲峯滿目放春晴。歷々銀鈎指下生。

自恨羅衣掩詩句。拳頭空羨榜中

名。

玄機が女子の形骸を以て、男子の心情を有していたことは、

この詩を見ても推知することが出来る。しかしその形骸が女子であるから、吉士を懐うの情がないことはない。ただそれは蔓草

が木の幹に纏まとい附こうとするような心であつて、房帷ぼういの欲ではない。玄機は彼があつたから、李の聘に応じたのである。此これがなかつたから、林亭の夜は索莫さくぼくであつたのである。

既にして玄機は咸宜觀に入つた。李が別に臨んで、衣食に窮せぬだけの財を餽おくつたので、玄機は安んじて觀内で暮らすことが出来た。趙が道書を授けると、玄機は喜んでこれを読んだ。この女のために経けいを講じ史を読むのは、家常の茶飯であるから、道家の言が却かえつてその新を趁おい奇を求め心こころを悦よろこばしめたのである。当時道家には中氣真術と云うものを行う習ならいがあつた。毎月朔さくぼ望うの二度、予め三日の齋ものいみをして、所謂四目四鼻孔いわゆる うんぬん云々の法を修するのである。玄機はのががるべからざる規律の下もとにこれを修す

ること一年余にして忽こつぜん然悟入する所があつた。玄機は真に女子になつて、李の林亭にいた日に知らなかつた事を知つた。これが咸通二年の春の事である。

玄機は共に修行する女道士中のやや文字ある一人と親しくなつて、これと寢食を同じゆうし、これに心胸を披瀝ひれきした。この女は名を采蘋さいひんと云つた。ある日玄機が采蘋に書いて遣やつた詩がある。

贈隣女  
りんぢよにおくる

羞日遮羅袖。  
ひをさけてらしうもてさへぎる

愁春懶起粧。  
はるをうれひてきしやうするにものうし

もどめやすきはあたひなきたから  
易求無価宝。

えがたきはこゝろあるらう  
難得有心郎。

枕上潜垂涙。

くわかんひそかにはらわたをたつ  
花間暗断腸。

みづからよくそうぎよくをうかゞふ  
自能窺宋玉。

なんぞかならずしもわうしやうをうらま  
何必恨王昌

采蘋は体が小くて軽率であつた。それに年が十六で、もう十九になつている玄機よりは少いので、始終沈重な玄機に制馭せられていた。そして二人で争うと、いつも采蘋が負けて泣いた。そう云う事は日毎にあつた。しかし二人は直にまた和睦する。女道士仲間では、こう云う風に親しくするのを対食と名づけて、傍から揶揄する。それには羨と妬とも交つているのである。秋になつて采蘋は忽失踪した。それは趙の所で塑像を造つて

いた旅の工人が、暇いとまを告げて去つたのと同時であつた。前に対食あざけを嘲あざけつた女等が、趙に玄機の寂しがつてゐることを話すと、趙は笑つて「蕙ひんやへうたう也飄蕩、蕙けいやいどうく也幽独」と云つた。玄機は字あざなを幼微と云い、また蕙けいらん蘭とも云つたからである。

趙は修法の時に規律を以て束縛するばかりで、楼観の出入などを嚴にすることはなかつた。玄機の所へは、詩名が次第に高くなつたために、書もとを索もとめに来る人が多かつた。そう云う人は玄機に金を遣ふこともある。物を遣ふこともある。中には玄機の美しい

ことを聞いて、名を索書に藉りて訪うものもある。ある士人は酒を携えて来て玄機に飲ませようとすると、玄機は僮僕を呼んで、その人を門外に逐い出させたそうである。

然るに采蘋が失踪した後、玄機の態度は一変して、やや文字を識る士人が来て詩を乞い書を求めると、それを留めて茶を供し、

しやうごひかげ

笑語

を移すことがある。一たび欸待せられたものは、友

いざな

を誘つて再び来る。玄機が客を好むと云う風聞は、幾もなくして

長安人士の間に伝わった。もう酒を載せて尋ねても、逐われる虞はなくなつたのである。

これに反して徒に美人の名に誘われて、目に丁字なしと云う輩が来ると、玄機は毫も仮借せずに、これに侮辱を加えて逐い出し



てしまう。熟じゆつかく客きやくと共に来た無学の貴きかい介けい子弟しよていなどは、幸さいにして  
 謾罵まんばを免れることが出来ても、坐客ざかくがあるいは句くを聯つらねあるいは  
 曲まがを度する間まにあつて、自みづから視みて欠然けつぜんたる処ところから、独ひそり窃かに席せきを  
 逃にれて帰かへるのである。

客きやくと共に 謔ぎやく浪ろうした玄機げんきは、客きやくの散ちじた後のちに、快おう々おうとして  
 楽たのまない。夜よが更あけても眠ねらずに、目めに涙なみだを湛たえている。そう云い  
 う夜旅よら中の温ぬるに寄よせる詩うたを作つくったことがある。

寄ひけい飛い卿によす

※砌かい乱ぜいらん蛩きよう鳴なき。

庭柯烟露清ていかえんろきよし。

月中隣樂響げつちゆうりんがくひびき。

楼上遠山明ろうじやうゑんざんあきらかなり。

珍簟涼風到ちんてんにりやうふういたり。

瑶琴寄恨生えうきんにきこんうまる。

君懶書札けいくんしよさつにもものうし。

底物慰秋情なにごとぞしうじやうをなぐさめん。

玄機は詩筒を発した後、日夜温の書の来るのを待った。さて日を経て温の書が来ると、玄機は失望したように見えた。これは温の書の罪ではない。玄機は求むる所のもものがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである。

ある夜玄機は例の如く、燈の下に眉を蹙めて沈思していたが、漸く不安になつて席を起ち、あちこち室内を歩いて、机の上の物を取つては、また直すくに放下などしていた。やや久しゆうして後、

玄機は紙を展<sup>の</sup>べて詩を書いた。それは楽人陳某<sup>ちんぼう</sup>に寄せる詩であつた。陳某は十日ばかり前に、二三人の貴公子と共にただ一度玄機の所に来たのである。体格が雄偉で、面貌<sup>めんぼう</sup>の柔和な少年で、多く語らずに、始終微笑を帯びて玄機の挙止を凝視していた。年は玄機より少<sup>わか</sup>いのである。

感懷寄人  
かんくわいひとによす

恨寄朱絃上。  
うらみをしゆげんのうへによせ

含情意不任。  
じやうをふくめどもいまかせず

早  
はやくも

知雲雨会。  
しるうんうのくわいするを

未起蕙蘭心。  
いまだおこさずけいらんのこころ

灼々桃兼李。  
しやくくたるもくとすも

無  
こくし

妨国士尋。  
のたづぬるをさまたぐるなし

蒼々松与桂。  
さうくたるまつとかつら

仍羨世人欽。  
なほうらやむよのひとのあふぐを

月色  
げつしよ

くていかいにきよく  
庭階浄。

かせいちくゑんにふかし  
歌声竹院深。

もんぜんこうえふのち  
門前紅葉地。

はらはすちいんをまつ  
不掃待知音。

陳は翌日詩を得て、直ただちに咸宜觀に來た。玄機は人を屏しりぞけて引見し、僮僕に客を謝することを命じた。玄機の書齋からはただ微かすかに低語の聲が聞えるのみであつた。初夜を過ぎて陳は辞し去つた。これからは陳は姓名を通ぜずに玄機の書齋に入ることになり、玄機は陳を迎える度に客を謝することになつた。

陳の玄機を訪とうことが頻しきりなので、客は多く卻しりぞけられるようにな

った。書を索めるもとるものは、ただ金を贈つて書を得るだけで、満足しなくてはならぬことになつたのである。

一月ばかり後に、玄機は僮僕いとまに暇を遣つて、老婢ろうひ一人を使うことにした。この醜悪な、いつも不機嫌な媼おうなはほとんど人に物を言うこともないので、観内の状況は世間に知られることが少く、玄機と陳とは余りに煩はん聒かつせられずにいることが出来た。

陳は時々旅行することがある。玄機はそう云う時にも客を迎えずに、籠ろうきよ居して多く詩を作り、それを温に送つて政を乞うた。温はこの詩を受けて読む毎に、語中に閨けいじん人の柔情じゆうじようが漸く多く、道家の逸思がほとんど無いのを見て、訝いぶしげに首を傾けた。玄機が李の妾しやうになつて、幾いくばくもなく李と別れ、咸宜觀に入つて女道

士になつた顛末は、悉く李の口から温の耳に入つていたのである。

七年程の月日が無事に立つた。その時夢にも想わぬ災害が玄機の身の上に起つて来た。

咸通八年の暮に、陳が旅行をした。玄機は跡に残つて寂しく時を送つた。その頃温ころに寄せた詩の中に、「満庭木葉愁風起、  
くわうしやのまどをとほしつきのしづむをしむ  
透幌紗窓惜月沈」と云う、例に無い凄惨せいさんな句がある。

九年の初春に、まだ陳が歸らぬうちに、老婢が死んだ。親戚しんせきの恃たのむべきものもない媪かは、兼かねて棺材まで準備していたので、玄機は送葬の事を計らつて遣つた。その跡へりよくぎよう緑翹びたいと云う十八歳の婢が来た。顔は美しくはないが、聰慧そうけいで媚態びたいがあつた。

陳が長安に歸つて咸宜觀に來たのは、艷陽三月の天であつた。玄機がこれを迎える情は、渴した人が泉に臨むようであつた。暫らくは陳がほとんど虚日のないように来た。その間に玄機は、度々陳が緑翹を擲揄やゆするのを見た。しかし玄機は初め意に介せなかつた。なぜと云うに、玄機の目中には女子としての緑翹はないと云つて好よい位であつたからである。

玄機は今年二十六歳になつてゐる。眉目端正な顔が、迫り視みる

べからざる程の気高い美しさを具えて、あらた新に浴を出た時には、琥珀色はくいろの光を放っている。豊かな肌は瑕きずのない玉のようである。緑翹は額の低い、おとがい頤の短い子かしに似た顔で、手足は粗大である。えり領や肘はいつも垢膩こうじに汚けがれている。玄機に緑翹を忌む心のなかつたのは無理もない。

そのうち三人の關係が少しく紛糾して来た。これまでは玄機の举措が意に満たぬ時、陳は寡言になったり、または全く口を噤つぶんでいたりに、今は陳がそう云う時、多く緑翹と語った。その上そう云う時の陳の詞は極ことばきわめて温和である。玄機はそれを聞く度に胸を刺されるように感じた。

ある日玄機は女道士仲間に招かれて、某の楼觀に往つた。書齋



を出る時、緑翹にその觀の名を教えて置いたのである。さて夕方になつて帰ると、緑翹が門かどに出迎えて云つた。「お留守に陳さんがお出いでなさいました。お出になつた先を申しましたら、そうかと云つてお帰なさいました」と云つた。

玄機は色を変じた。これまで留守の間に陳の来たことは度々あるが、いつも陳は書齋に入つて待つていた。それに今日は程近い所にいるのを知つていて、待たずに帰つたと云う。玄機は陳と緑翹との間に何等かの秘密があるらしく感じたのである。

玄機は黙つて書齋に入つて、暫く坐まして沈思しんししていた。猜疑さいぎは次第に深くなり、忿恨ふんこんは次第に盛んになつた。門に迎えた緑翹の顔に、常に無い侮蔑ぶべつの色が見えたようにも思われて来る。温言

を以て緑翹を賺す陳の聲が歴々として耳に響くようにも思われて来る。

そこへ緑翹が燈に火を点じて持つて来た。何気なく見える女の顔を、玄機は甚だしく陰険なように看取した。玄機は突然起つて扉に鎖を下した。そして震う声で詰問しはじめた。女はただ「存じません、存じません」と云つた。玄機にはそれが甚しく狡猾なように感ぜられた。玄機は床の上に跪いている女を押し倒した。女は懼れて目を睜っている。「なぜ白状しないか」と叫んで玄機は女の吭を扼した。女はただ手足をもがいている。玄機が手を放して見ると、女は死んでいた。

玄機の緑翹を殺したことは、やや久しく発覚せずにいた。殺した翌日陳の来た時には、玄機は陳が緑翹の事を問うだろうと予期していた。しかし陳は問わなかった。玄機がとうとう「あの緑翹がゆうべからいなくなりましたが」と云って陳の顔色を覗くと、陳は「そうかい」と云っただけで、別に意に介せぬらしく見えた。玄機は前夜のうちに観の背後うしろに土を取った穴のある処へ、緑翹の屍かばねを抱いて往つて、穴の中へ押し墜おとして、上から土を掛けて置いたのである。

玄機は「生ける秘密」のために、数年前から客を謝していた。

然るに今は「死せる秘密」のために懼おそれを懐いだいて、もし客を謝したら、緑翹そうせきの踪跡そうせきを尋ねるものが、観内に目を著つけはすまいかと思つた。そこで切せつに会見を求めると、強いて拒まぬことにした。

初夏の頃に、ある日二三人の客があつた。その中の一人が涼を求めて観の背後に出ると、土を取つた跡らしい穴の底に新しい土が填うまつていて、その上に緑色に光る蠅はえが群がり集まつていた。その人はただなんとなく訝いぶかしく思つて、深い思慮をも費さずに、これを自己の従者に語つた。従者はまたこれを兄に語つた。兄は府の衙卒がそつを勤めているものである。この卒は数年前に、陳が払暁に咸宜觀から出るのを認めたことがある。そこで奇貨措おくべしと

なして、玄機を脅おびして金を獲えようとしたが、玄機は笑つて顧みなかつた。卒はそれから玄機を怨うらんでいた。今弟の語ことばを聞いて、小婢しょうひの失踪したのと、土穴に腥羶せいせんの気があるのとの間に、何等かの関係があるように思った。そして同班の卒数人と共に、すきを持って咸宜觀に突入して、穴の底を掘つた。綠翹の屍は一尺に足らぬ土の下に埋まつていたのである。

京兆けいちようの尹温璋いんおんしょうは衙卒の訴もとに本づいて魚玄機を逮捕させた。玄機は毫ごうも弁疏べんそすることなくして罪に服した。楽人陳某は鞠き問くもんを受けたが、情を知らざるものとして釈ゆるされた。

李億はじめを始として、かつて玄機を識つていた朝野の人士は、皆その才を惜んで救おうとした。ただ温岐一人は方城の吏になつて、

遠く京師けいしを離れていたもので、玄機がために力を致すことが出来なかつた。

京兆の尹は、事が余りにあらわになつたので、法を枉まげることが出来なくなつた。立秋の頃に至つて、遂つひに懿宗いそうに上奏して、玄機を斬ざんに処した。

玄機の刑せられたのを哀むものは多かつたが、最も深く心を傷めたものは、方城にいる温岐であつた。

玄機が刑せられる二年前に、温は流離して揚州ようしゅうに往つてい

た。揚州は大中十三年に宰相を罷めた令狐綯が刺史になつてい  
 地である。温は綯が自己を知つていながら用いなかつたのを怨ん  
 で名刺をも出さずにいるうちに、ある夜妓院に酔つて虞候に撃た  
 れ、面に創を負い前歯を折られたので、怒つてこれを訴えた。綯  
 が温と虞候とを対決させると、虞候は盛んに温の汙行を陳述して、  
 自己は無罪と判決せられた。事は京師に聞えた。温は自ら長安に  
 入つて、要路に上書して分疏した。この時徐商と楊収とが宰  
 相に列していて、徐は温を庇護したが楊が聴かずに、温を方城に  
 遣つて吏務に服せしめたのである。その制辞は「孔門以德  
 もつてさきとなし、文章為末、爾既德行無取、文章  
 行爲先、文章為末、爾既德行無取、文章  
 章何以称焉、徒負不羈之才、罕有適時  
 うなんぞもつてしようせられんや、いたづらにふきのさいをおふ、てきじのようあること

之まれなり用り」と云うのであつた。温は後に隋ずい県けんに遷うつされて死んだ。子の憲も弟の庭てい皓こうも、咸通中に官に擢ぬきんでられたが、庭皓は龐ほうく勛んの乱に、徐州で殺された。玄機が斬られてから三月の後の事である。



## 参照

## 其一

魚玄機

三水小牘

南部新書

太平広記

北夢瑣言  
ほくむさげん

続談助

唐才子伝

唐詩紀事

全唐詩（姓名下小伝）

全唐詩話

唐女郎魚玄機詩

## 其二

温飛卿

旧唐書

漁隱叢話  
ぎょいんそうわ

新唐書

全唐詩話

唐詩紀事

六一詩話

滄浪詩話

彦周詩話

三山老人語錄

雪浪齋日記

北夢瑣言

桐薪

玉泉子

南部新書

握蘭集

金筌集

漢南真稿

溫飛卿詩集

(大正四年四月)





# 青空文庫情報

底本：「森鷗外全集<sup>5</sup>」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

入力：清角克由

校正：ちはる

2001年3月6日公開

2006年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 魚玄機

森鷗外

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>